

(要約版)

狩猟採集民ムラブリのたばこ文化と市場経済化をめぐる変化の社会人類学的研究

助成研究者 二文字屋脩 (首都大学東京大学院・博士後期課程)

1. 目的

本研究の目的は、タイ北部の山岳地帯に住む狩猟採集民ムラブリを対象とし、近年の市場経済化をめぐる社会・文化変容の考察検討を通じて、嗜好品としてのたばこの社会的価値がどのように変化しているのか、人類学的に明らかにすることである。そこで本研究では、先行研究の精読を通して、伝統的な「ムラブリ社会」なるものの像を通時的に再構築し、嗜好品としてのたばこを切り口に、その歴史的変遷のなかで生じた社会・文化変容に着目する。なお、嗜好品としてのたばこに着目するのは、近代的な合理的思考では必ずしも十分に理解することのできない喫煙という行為が、市場経済化を通じてどのように社会・文化的価値観に反映されているのか、今日のムラブリ社会が直面している「近代化」を捉える重要な指標のひとつになりうると考えられるからである。

1970年代半ばまで、ムラブリは森の中を移動しながら狩猟採集生活を送っていたが、ムラブリ社会は今日、70年代後半から大規模に進んだ森林破壊と、約10年前に始まった国家プロジェクトにより大きな社会・文化変容を経験している。前者ではムラブリにとって重要な生活空間である森林が減少し、同時に狩猟採集生活を維持していくための生態系が崩れるという事態を引き起こし、また後者では定住生活や貨幣経済が導入されたことで伝統的な社会生活を維持できなくなるという事態を招くこととなった。またこうした変化の中で、生業様式や生活様式の相違によって成立していた近隣農耕民モン (Hmong ;あるいはミャオ Miao) との関係も、現在では資源争いをめぐる競合関係へと変化してきた。こうした社会的経済的側面の変容の諸相を把握するため、本研究ではムラブリが唯一の嗜好品としてきたたばこを切り口に、今日のムラブリの社会生活を明らかにする。

2. 方法

(1) 文献研究

ムラブリ社会の全体像を把握するため、入手可能なムラブリに関する文献資料を可能な限り収集し、分析・検討した。なお、日本では入手できない文献資料は2010年7月30日から8月28日までの、約一ヶ月にわたる現地調査の際に、チュラロンコーン大学、タマサート大学、チェンマイ大学の大学図書館にて収集した。

(2) 実地調査

タイでの文献収集と合わせて、本研究ではタイ北部に位置するナン県にて実地調査を

敢行した。実地調査では簡単な世帯調査と聞き取り調査を行った。実地調査を行った村は、約 180 人のムラブリが暮らす Huay Yuak 村で、この村を調査地として選定したのは、他の村に比して賃金労働、国家プロジェクトないしタイ王室プロジェクト圧力、エスノ・ツーリズム、タイ国民化の影響下にあり、「近代化」による社会・文化変容がもっとも明確に把握できると考えたからである。

3. 結果

今日のムラブリ社会における社会・文化変容の諸相を捉えるため、まず先行研究の精読を通じて伝統的な「ムラブリ社会」なるものを再構築した。とくにここでは社会・文化変容の大きな要因を、定住化とそれによる市場経済化にあると考えたため、ムラブリの移動生活や社会生活、また近隣農耕民との交換経済を通じた共存関係に焦点を当てた。そこではとくに、ムラブリに先立って早くから定住した近隣農耕民モンとの共存関係について明らかにしたが、ムラブリが定住化する以前は森と村でそれぞれ生産された生産物を交換することで成立していた両者の相互依存的な共存関係が認められた。

しかしムラブリが 1999 年に国家プロジェクトによって定住化を果たすにつれ、モンに雇われる賃金労働者化するなかで、両者の関係は共存関係から競合関係へとその関係性の質を変えていった。また定住したムラブリに対して、国家プロジェクトは従来の狩猟採集に代わる生業として観光業を推進し、こうした貨幣獲得を通じてムラブリは市場経済への参入を必然的に果たすようになった。そしてこれら一連の社会・文化変容は、ムラブリの社会生活に大きな変化をもたらした。さらにモンとムラブリのパトロン・クライアント関係が、今日のムラブリの経済活動を規定しているため、ムラブリ自身による経済的自立はますます困難となっている。

4. 考察

ムラブリの伝統的な社会生活、および近隣農耕民との民族間関係とその歴史的変遷、そして近年の定住化と市場経済化による社会・文化変容を受けて、ムラブリ社会におけるたばこの社会的価値もまた変化してきた。以前は物々交換を通じて他民族から得ていたたばこは、交換物の中でも唯一の嗜好品であり、たばこに対して熱狂的な関心を示すムラブリにとって日用品ともいえる身近なものであった。しかし近隣農耕民であるモンがムラブリに先立って定住化し市場経済化していくにつれ、ムラブリは賃金労働者として蒙の耕作地で働くようになり、さらにこうした労働提供は、ムラブリが定住し市場経済化するにつれて増え、また貨幣経済の中で「貧困」であることが認識されると、たばこは身近な交換物から購入物となり、現在たばこ文化は縮小傾向にあることが明らかになった。